釣れ釣れなるままに

２００２年思い出の釣行記 PART.　３

柳生流の家訓

鹿島釣狂

釣遊会第４回大会

☆開 催 日	平成１４年７月２１日			
☆開催場所	庶野漁港～音調津漁港			
☆入釣場所	オンコの沢			
☆潮	満潮	２２：３７	１３３㎝	
	干潮	０６：５４	２７㎝	
☆釣　　果	カジカ	３８０	㎜	２
	アカハラ	３４７	㎜	２
	ハゴトコ			１
	重量	２５６	０ｇ	
☆成　　績	合計点数	９８３	点	
	成績	５	位	
	持ち点	５	点	
	累計点	１０６	点（①5050⑤）	
	順位	１７	位	

熱い夏の訪れ

大会目の前々日、芦別歓楽街でちょっとした酒席があり、久しぶりにど田舎からネオン街に繰り出した。うたげが開かれた和室には祭りの開始を告げる打ち上げ花火の大音響が障子を震わせた。格子戸を開け放つと夜空に繰り広げられる大輪の花火がお猪口（ちょこ）を七色に焦がす。

短い夏を謳歌する『星の降る里・芦別健夏祭り』が７月１９日から２１日までの３日間、駅前通りをメーン会場にして開かれた。石炭の都から星の都へと過疎化の波が侵攻し、一抹の寂しさを隠し切れない人々もこの時ばかりは、北国の街を挙げて熱くなる。

今年はメーンの追い山笠に加えて、市の無形文化財『芦別獅子』と本家に当たる富山県城端町の『西明獅子』とが初めて共演し、恒例の「あしべつ節」に合わせて練り歩く「千人踊り」が繰り広げられるらしい。

締め込み水法被姿のかき手が沿道からの水を浴び、市民の無病息災を願い、約１トンの曳き山車を担いで疾走し、タイムを豪快に競い合う姿を思い浮かべ、私の心も熱くなる。しかし、釣遊会の大会を明後日に控えているので深酒は禁物と早々に引き上げ床に就く。

貧しさゆえの浅はかさ

早朝、岩見沢へ向けて車を走らせる。空き家になった自宅に戻り地下に眠っている釣り道具を確認する。第１回大会優勝の余韻を残して雑然となった道具類からはカツオやイカゴロの残り香（というより悪臭）が立ち込めている。リュックやバッカンには青白いカビが生え、それを動かす度に狭い地下室に飛散し、私の鼻孔や喉をくすぐる。

地下室の小さな窓を開け放ってから、一旦、エサの買い出しにカナダ屋釣具店へ向かう。ソーダーガツオが大小入り乱れて雑然と冷涼庫に入っており、極力大きいものを選んでカゴに入れる。我ながら全て大きいものを選ぶことができたと得意満面でレジに向かった。そこで初めて、通常の２５０円の物に３００円の物の２種類が混ざりあっていた事が分かり、己の浅はかさを思い知らされた。

釈然としない気持ちのまま地下室にもぐりこむと、幾分かび臭さが抜けていたので、仕掛け作りに精を出す。前回使用の物にハリスと針とを交換する。残りは以前作っておいた物を束にして仕掛け入れに忍ばせる。

天気予報では、波が１ｍ～１．５ｍで今夜から明日にかけては曇り後晴れと告げている。時化には弱いオンコの沢も今回は大丈夫であろう。

集合場所に着くと、いつもの例会に比べて参加者が極端に少ない。皆がそれぞれ都合ができたということであり、何をおいても釣り大会に参加するはずの釣遊会としては甚だ残念なことであり、さみしい思いをする。

島氏に入釣場所を尋ねるとオンコの沢はやめてオニトップに入るという。先日の下見釣行での私たちの釣果が横山秀視氏により新聞紙上の釣り情報欄に紹介された。併せて、４８・４９㎝のアブラコと４０㎝上のカジカの大物をぶら下げてニヤついている島氏と私の

写真が掲載されていたのである。それから３週間が経過し、その記事をもとに、何人もの釣り人がオンコの沢に大挙して押し寄せ、魚が釣り尽くされたと付け加えられる。
　夏枯れの時期を迎えるとは言え、何せ名だたる黄金道路である。魚は更に沖から入って来ていることを念じ、オンコの沢入釣に迷いはないのだが・・・。

下見とは状況が違う

　まずは嫁さんのアカハラ狙いでオンコの沢トンネル手前で降ろしてもらう。満潮の時間帯がとうに過ぎており防潮堤の下には砂原が見え、その先の波打ち際はガチャガチャの岩が剥き出しになっている。アカハラを狙って近投するが根がかりばかりを繰り返し釣りにならない。遠投でも同じ状況である。
　仕方がないので荷物を担ぎ直し、右方向５００ｍ程に見える階段から降りて砂浜に出る。イカゴロ仕掛けをドボンドボンと近投すると間もなく３５㎝程のアカハラが２匹来た。遠投の竿にはハゴトコも３匹来て規定の魚はそろったのでさらに移動する。
　午前３時、満を持して下見で大釣りした場所に竿を立てる。下見のときは隠れていた岩が満潮を過ぎて剥き出しになっており、仕掛けが波打ち際で根がかりしてあずましくない。しかも沖から入り込んで来ているはずの大アブラコは途中で道草を食っているようである。ピンともカンとも来ないで、時間ばかりが経過していく。
　オンコの沢第２覆道で降りた岡氏がやって来た。嫁のアカハラを取ったので彼の十八番である岩場の先に出てやると言う。これまた、下見の時には見えなかった岩盤が干潮のために沖に向かって伸びている。私は何度打ち返してもアタリが一向に出ないので、盤の先に出た岡氏の様子を眺めることになる。すると早速、岡氏が竿を大きく曲げて昆布と格闘している。更に岩の前の方に出て行き、腰を曲げてしゃがみこんでいる。立ち上がってこちらに向きを変えると、懐に大きなアブラコを抱えているのが遠目でも分かる。何度か同じような動作を繰り返しているので、岡氏の所へ偵察に行ってみる。バッカンを覗くと４５㎝を越える見事なアブラコがオビレを曲げて何本も収まっていた。
　同じ盤に乗って、違う方向に打つ場所はあるのだが、手前に張り出した岩が邪魔をして打ち込み場所を狭く遮っている。私のような未熟な分際ではちょっと荷が重いか・・・。状況の違いを素早く察知し、臨機応変に攻め方を変えることが出来ない己の未熟さに不甲斐なさを感じる。

北海道の釣り会？

　どうしたものかと釣り場に戻ると、防潮堤の上から「北海道の釣りです。どうですか？」と声がかかった。名前はメジャーな雰囲気があるが、あまり聞いたことがない釣り会だなと思いながらあやふやに応じてしまった。
「さっぱりです。お宅はどうですか。」
「音調津から見て来ていますが他も全然だめなようです。アブラコの顔はほとんど見るこ

とができませんでした。」
「随分遠い所から歩いて来たものですね。頑張ってください。」さらにピントのずれた内容で応対していると、彼は駐車してあった車に乗り込んだ。「北海道の釣り。北海道の釣り？・・・？」と呪文のように唱えているとやっと貴社の『北海道のつり』に行き着いた。いつも大変お世話になっているのに肝心な時になると回転しない頭を恨めしく思う。振り返ると水交社の車は庶野の方に向けて出発した後であった。

柳生流の家訓

６時、最干潮時を迎えたので下見の時に横山氏が入釣していた所へと移動する。干上がった大きな岩の上に三脚を設置するが足元が不安定で覚束無（おぼつかな）い。それでも何とか三本とも改めて出し終えた。何度か彼方此方と打ち返しているうちに海水に着水してすぐに糸を張り、エサが海底に沈んだと思えるところでゴンゴンとアタリが出た。更にゴンゴンゴンと来たところで竿を煽る。今日初の大物だ。カジカ４０㎝が大口を開けてやってきた。沖から入って来たばかりと思える真っ赤なカジカであった。針をはずしていると、飲み込んだカツオとともに磯ガこが２匹口からあふれ出た。その２匹共磯を歩きだす。今まさに磯ガニを口に銜え、飲み込んだところで新たにカツオが頭上から降って来たのであわてて食いついたものだろう。

７時、岡氏が道具を片付け始める。随分早いがもう十分釣り尽くしたのだろう。エサも底をついたのでと彼は言うが、エサなら私は十分もっている。岡氏の後に移動しようか？どうしたものだろう。なんだか新たな活力が生まれてこない。同じ所で無駄な努力を繰り返すばかりで一向に魚からの便りは届かない。時間ばかりが経過し、結局、締め切り時間となり、項垂れて片付けることになった。

柳生流の家訓がふっと頭を過（よぎ）った。
「小才は縁に出会うて縁に気づかず
中才は縁に出会うて縁を生かさず
大才は柚触れおうた縁をも生かす」

ノーベル化学賞に輝いた田中耕一さんは、試薬を使ったときの手違いからその偉大な発見があったという。普通の人なら、間違えたらそれを捨ててしまうところを、もったいないので、それで試したことが偉業に結び付いたと言うのだ。

田中さん本人は「棚からボタ餅」と言うが、はたしてそうだろうか。棚ボタとは本人の努力無しで得る不労所得のようなものだが、この場合は手違いという無駄な努力の結果なのである。それは全くの偶然の賜物と言えるがその陰には無駄な失敗の繰り返しがあったのである。

さてさて、私は岡氏の穴場での大漁に偶然にも出くわした。縁に出会うて縁に気づき、釣り場の様子も伺いに行った。しかし、努力を怠りその縁を生かすことができなかったのだから中才と言うところか。いやいや、その努力もしていないのだから中の下と言うとこ

ろなのだろうか。

チャンスは、いつも、そしてどこにでも在り得る。そうした偶然を生かすも殺すも本人の努力次第、それも日常的な努力の積み重ねで己の感覚を磨かなければならないのだ。

岡氏は海に注ぎ込んでいる小川で胴長靴を洗っている。私はと言えば、イカゴロを掴んだ手をウェイダーで拭き、いつもそのまま地下室に放って置くので、ウェイダーの彼方此方に白いカビが生えている有り様である。今日は蒸しているのでウェイダーの中には汗がたまっており、はいたジャージがずぶ濡れである。この次履く時はウェイダーの内側にもカビが生えているのであろう。次の時のための努力を怠っているのだからやっぱり小才なのか・・・。

冷え過ぎた生ビール

バスは皆を集めてエリモの審査会場に向かう。誰からもあまり芳しい便りは開かれない。唯一音調津のアカハラの型がよいようだ。

審査結果

優　　勝	岡　英成	１３１９点	(ｱﾌﾞﾗｺ４５５㎜+ｱｶﾊﾗ３４８㎜+５１６０ｇ)	オンコ沢
準 優 勝	大前健治	１２９３点	(ｱﾌﾞﾗｺ４６０㎜+ｱｶﾊﾗ３７９㎜+４５４０ｇ)	咲　　梅
３　　位	堀内正博	１２２６点	(ｱﾌﾞﾗｺ４１４㎜+ｱｶﾊﾗ４２２㎜+３９００ｇ)	音調津港
４　　位	嵐　光博	１０２８点	(ﾊｺﾞﾄｺ２９３㎜+ｱｶﾊﾗ４１０㎜+３２５０ｇ)	音調津港
５　　位	鹿島釣狂	９８３点	(ｱｶﾊﾗ３４７㎜+ｶｼﾞｶ　３８０㎜+２５６０ｇ)	オンコ沢
身長優勝	大前健治	４６，０㎝	(アブラコ)	咲　　梅

私の獲物はぱっとしたものではなかったが、参加者が少なかった事もあり何とか入賞できた。

昼食でいただいたラーメンがやけに不味い（まずい)。釣りの後のラーメンはいつも美味しく感ずるものなのに・・・、大変な不出来だ。

生ビールを注文した。出てきたジョッキの中に氷が浮いている。ジョッキを長い間、冷凍庫で保管してあったのであろう、グラスの外側にも内側にもぶ厚い氷が張り付いている。グラスの水をきれいにふき取って冷やしていたのならともかく洗い立てのグラスをそのまま冷凍庫に格納していたものに違いない。生ビールというものは冷え過ぎると良くない。暑い作業から解放されて飲む一杯は、ほどほどの冷え具合でなければならない。スイカやメロンを冷蔵庫で冷やしておくと甘みがさっぱり感ぜずおいしくないのと同じである。こういう物は水道水や渓流に浸けておくぐらいが丁度よいのである。昔の井戸水なんてのが最高であろうと想像する。冷え過ぎたビールは喉越しはよくなるのだが、ビール酵母のフンと鼻に抜ける美味みが消えてしまうのである。

新たな誓い

政界に蔓延（はびこ）る汚職、経済の先行き不透明感と失業者の増大、犯罪や非行の低年齢化などをよそにして、大自然の大海原で清浄な空気に覆ることは、私の萎（しぼ）みかけた命の灯火に新たなエネルギーを注入してくれることになる。

私が触れる大海原は霊気に満ち、俗塵にまみれた心を清らかにしてくれる。考えることも、日常感覚を離れた気宇壮大なものになる。

私の釣りの心得ができた。

1. 己を知ること。
2. 海を知り、海を敬うこと。
3. 常に新たな前進を求めること。
4. 周到な準備と一切の危険を避けること。

うぬぼれと希望的観測だけでは海に大きなしっぺ返しを食らう。人間は自分の力で生きているのではなく、大自然の力によって生かされている。だから、どこまでも自然の法則に従って生きていくことが大切なのだ。変転する眼前の事象に惑わされることなく、万古不易の自然の法則を見極め、法則敵った道を、新たな気持ちで一歩一歩進んでいきたいと思う。